

Title	《資料》ダイアログを営むためのいくつかの決めごと
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2000, 7, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5311
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

《資料》

ダイアローグを営むためのいくつかの決めごと

私たちが日本でSDを実施する際に参考になっている一連のルールを、ここに掲載しておく。これは、ヴァン・ホーフト氏の論文 (Stan van Hooft, "Socratic Dialogue as Collegial Reasoning", from *Ethics & Justice*, Volume 2(1) 1999, available online at <http://www.ethics-justice.org/v2n>) から採用したものである。

手続き

1. 議論を始めるにあたって、進行役が(時には参加者と相談の上で)一つの一般的な問い、あるいは言明(テーマ)を与える。
2. まず与えられたテーマに即して、参加者が自分の経験した具体的な「例」を挙げる。
3. その中からグループが、一つの「例」を選択する。それがダイアローグを通じての分析と根拠づけの土台となる。
4. 参加者の発言した重要な事柄は、すべての参加者が見ることができ、また議論の経過に関してクリアであることができるように、ステイトメントのかたちで板上に書き出される。

適切な「例」のための基準

1. 例は参加者自身の経験から出される。仮定に基づいた、あるいは「一般化された」例(「こんな事がたびたび私にはある…」といったような例)は適切ではない。
2. 例は複雑なものであってはならない。単純な例がよい。出来事の経過がひとまとまりであれば、グループは一つの視点でそれに集中できる。
3. 例はダイアローグのテーマに関連するものでなければならない。さらに、すべての参加者が、例を出した人の身になって、例を理解できるのでなければならない。
4. 例は、すでに終わった経験に関するものでなければならない。もし参加者がその時にもまだこだわっている経験であれば、それは適切ではない。例えば、もしそれが本人にとって未解決の事柄であれば、他の参加者はそれを評価してしまったり、アドバイスを送ってしまったりする危険が生じる。また、例に感情的な含みが残っている場合には、議論そのものが感情的に人を傷つけることになる恐れがある。
5. 参加者は、自分の例をくまなく示そうとしないといけない。例を出した人は、それに関するあらゆる重要な情報を提供し、他の参加者からの質問に答える必要がある。それによって、他の参加者が例および例のテーマへの関連性を理解することができる。
6. 例を出すとき、積極的な例、つまりテーマを肯定するような例が優先される。

参加者のためのルール

1. 参加者が、自分の経験に基づいて発言すること。本で読んだ事柄や人から聞いた事柄を発言してはならない。
2. 正直に考え、相手に質問すること。相手の発言に関して本当に疑問に思ったことだけを、すべて表明すること。
3. すべての参加者は、自分の考えたことをできるだけ明確かつ簡潔に表明するよう義務づけられる。その結果、議論の中で表明された考えに、誰もが拠って立つことができる。
4. 参加者は、自分の考えに特に固執すべきではなく、常に他の参加者の考えを理解しようと努力すべきである。このために、進行役は特定の参加者に対して、他人の発言した内容をその人自身の言葉で表明するよう促してもよい。
5. テーマの意味や議論の成り行きを見失った人は、グループが今どのような所に立っているのかを明確にするよう、進行役や他の参加者に助けを求めるべきである。
6. 抽象的な発言をするとき、それは議論の中心となっている具体的な経験や「例」に基礎を置いていなければならない。
7. 参加者の間で互いに見方がぶつつかっている限り、また事柄が十分に明確になっていない限り、その件に関する議論は続行されなければならない。
8. たとえその気がなくても、ダイアログ全体に参加することは重要であり、また見返りのあるものである。合意に至る前に、それをやめて立ち去ったり議論を放棄してはならない。

メタダイアログ

1. 議論の中で生じてきた問題（それがどんな問題でも）についてグループに注意を促すために、進行役や参加者は一種の「タイム」を要求することができる。
2. 参加者が議論の筋道を見失ったり、他人の言うことが理解できなかったり、あるいは議論に取り残されたと感じたりした場合、これができる。あるいは、参加者が議論の進展の仕方に困惑したり、グループが合意を得るために有効と思われる議論の進め方を議論したい場合、これができる。
3. どのような理由であれ、またいつでも、ダイアログそのものに関する議論、あるいはメタダイアログを呼び出すことができる。
4. メタダイアログの司会は、適切であると考えられれば、進行役以外の参加者の誰かが務めてもかまわない。
5. メタダイアログで議論となった問題がすべて解決しない限り、あるいは本来の議論の進め方に関する展望が明確に定まらない限り、グループは本来の議論に戻るべきではない。